

## 監修のことば

以前、私の監修で書籍「肺癌内科診療マニュアル」(医薬ジャーナル社)を出版しています。この本は単なるエビデンスの解説に留まらず、エビデンスのないところは我々が実際に行っている工夫を丁寧に記述することで、監修者・編集者が実際に行っている治療を知っていただくことを主眼に置いて作成したのですが、思いのほか好評であり、同じような企画が支持療法でできないかと考え、本書を企画させていただきました。

肺がんの薬物療法は年々新薬が上梓され、標準的治療方法も驚くべきスピードで変わってきています。また、新しい薬剤は、免疫チェックポイント阻害剤などこれまでとは全く違った作用を持っていることが多く、副作用対策も従来の細胞傷害性抗がん剤と同じようにはいきません。しかし、開発スピードがあまりに早いため、副作用対策は高いエビデンスを待たずに実地臨床の中で工夫をして対応せざるを得ない環境になっています。まさしく、「肺癌内科診療マニュアル」出版時のフィロソフィーが本書「肺がん支持療法マニュアル」で生かせる状況になっていると感じております。

本書は、企画以外はいつものように三浦先生をはじめとした編集者にお任せしています。編集者は全て私が静岡がんセンターに勤務していた頃に私の部下として働いており、現在の職場は異なりますが、肺がん診療に対する考え方・方法はほぼ同じであり、深く信頼しています。私が提示した要望は、「エビデンス以外のことも盛り込む」こと、特に「エビデンスのないことに関しては、実際に自分達が実施していることを記述する」ことです。この場を借りて、中心的役割を果たしていただいた各先生方に御礼を申し上げます。

本書は少し大きく、持ち歩くには不便かもしれませんが、読み物としても実地診療に使用するマニュアルとしても、実際に肺がん患者の診療に携わる医療関係者に十分に役立つ内容になっているものと自負しています。願わくば数年毎にupdateし、いつも皆様の近くにあって役に立つマニュアルとなってほしいと思っております。是非ご活用ください。

2017年10月

山本 信之

## 編集のことば

現在、肺がんのみならず、がん治療の進歩はまさしく日進月歩である。毎年のように新たなエビデンスが生み出され、新たな薬剤が患者さんの元に届くようになった。分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害剤、まだまだその広がり・深まりは留まるところを知らない。

そのなかでわが国の肺がん診療を支えているのは、呼吸器内科や腫瘍内科の医師、さらには呼吸器外科、放射線科の先生方、そしてメディカルスタッフの皆さんである。新薬や治療薬の情報は溢れ返るほど皆さんの手元に届く一方で、それらの薬剤の安全な使用方法、副作用対策、すなわち支持療法に関して学ぶ機会が十分ではないことは大きな問題である。進行期がん治療の最終目標は生存期間の延長、そして生活の質（QOL）の改善である。新規治療の開発はもちろんのこと、支持療法のスキルの充実は患者さんのQOLに直結し、ひいては生存期間の延長にも繋がる可能性を秘めている。それにもかかわらず支持療法に関するエビデンスが新薬の開発に追いついていないことも、紛れもない事実である。

拙書は肺がんの实地診療に携わる先生方、スタッフの方々を対象として、現在の支持療法に関するエビデンスを整理し、エビデンスのない部分は執筆者の経験に基づいて、具体的な処方例を示すことで読者の皆さんの明日からの臨床に生きるマニュアルを目指して作成した。さらに自分達の10年以上前がそうであったように、“こんなときみんなはどうしているのだろうか？”、“エビデンスはこうなっているはずだけど、目の前の患者さんには本当にこれで大丈夫なのか？”などという疑問に答えるためのマニュアルにしたいと考えた。すべての医師の傍らに肺がんのエキスパートが居て、患者さんのことを相談できればよいが、それは現実的ではない。

そこで拙書では、各地の肺がん臨床を最前線でリードする若手医師達に実際の症例にはどうしているのか、について具体的なアンケートを実施し、現在のエビデンスとともに掲載した。エビデンスが確立した支持療法はもちろん、エビデンスの全くない支持療法も、目の前の患者さんによって正しくもなり間違っただけのものとなる。拙書の内容を読者の皆さんに吟味して頂くことでエビデンスとエクスペリエンスが融合され、より良い治療が皆さんの目の前の患者さんに提供できるように願っている。

最後に、日常診療で大変忙しい中エビデンスを整理して頂いた執筆者の皆様、アンケートにお答え頂いた先生方、指導してくださった山本信之教授、そして長期にわたり編集者のわがままに付き合ってくれた医薬ジャーナル社の皆様に心より感謝致します。

2017年10月

三浦 理・宿谷 威仁・赤松 弘朗・鈿持 広知